

# ケルソネーソス、ナクソス、 エウボイア植民

— 「エンクテーマタ型植民」の検討 —

前野弘志

はじめに

筆者は以前、拙稿『[TAI] Σ ΑΠΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΛΕΡΟΧΙΑ [ΙΣ] — クレールーキア概念の再検討、碑文史料 IG. I<sup>3</sup>237 の解釈をめぐって —』において、アポイキア、クレールーキアというのは、従来言われてきたような、市民権を指標とした植民市分類法ではなく、領域観念を指標としたものではなかったかという仮説を立ててみた<sup>1)</sup>。すなわち、アポイキア (ἀποικία) もクレールーキア (κληρουχία) もアテーナイの領土であり、植民者がアテーナイ人であることに違いはないが、当時の領域観念からすれば、前者は、他のポリス領域の中に存在するエンクテーマタ (ἐγκτήματα) であり、後者は、例えばアッティカの外にあっても、アテーナイ固有の領土であるクテーマタ (κτήματα) であったのではないか、古典期の史料に現れるケルソネーソス、ナクソス、エウボイアというグループ記述がアポイキアの、レームノス、イムブロス、スキュロスというグループ記述がクレールーキアの典型例であったのではないか、そして、アテーナイ人は、このような認識を前413年以降持つようになったのではないかと言うものであった。

この仮説を補強するために、第1のケーススタディとして、レームノス、イムブロス、スキュロス植民の検討を既に試みた<sup>2)</sup>。その結果を一口で言うならば、クテーマタないしはクレールーキアと呼ばれた植民市の本質的特徴は、異民族を追い出して建設されたことにあるとするものであった。小稿は、その続編とも言うべきもので、エンクテーマタないしはアポイキアと呼ばれた植民市の本質的特徴がそれとは対称的なものであったことを証明しようとするものであ

る。古典期におけるアテーナイ植民市に係わる際、帝国支配を背景とした植民市建設に伴う支配・被支配という問題の解明も当然重要な課題となるであろうが<sup>3)</sup>、ここではこの問題には敢えて触れないこととし、考察のポイントは、前回と同様(1)植民者が先住民と同居したか、(2)植民者はアテーナイ人であったか、(3)植民市の領土はアテーナイのものであったか、以上の3点に絞られる。

ところで、これら一連の拙論は、同時代人による植民市分類法の再現を試みているのであるが、それにこだわる理由は、そのことがポリスの変質を見る一つの方法になりはしないかという期待があるからである。つまり、ギリシアにおける植民は、例えそれにその時々の政治的・軍事的目論見が付随していようと、本質的にポリスの維持・最生産の営みであると見るならば、同時代人が植民をどのように分類・認識していたかを分析することは、彼等自身のポリス観を知る手がかりになるのではないかと考えられるからである。しかし、その問題に立ち入るためには、まず方法論を整備する必要があり<sup>4)</sup>、小論はその作業過程として位置付けられる。

註1) 「クレルーキア概念」、『西洋史学報』、16号、1990年、1-24頁（以下、拙稿Ⅰと略す）。「[TAI] Σ ΑΠΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΛΕΡΟΧΙΑ [ΙΣ] — クレルーキア概念の再検討 碑文史料 IG. I<sup>3</sup>237 の解釈をめぐる —」、『史学研究』、191号、1991年、34-52頁（以下、拙稿 と略す）。

2) 「レームノス、イムプロス、スキュロス植民 — 「クテーマタ型植民」の検討 —」、『史学研究』、195号、1992年、49-70頁（以下、拙稿Ⅲと略す）。

3) 植民市と帝国支配との問題を取り扱った研究は枚挙に暇がないが、主なものだけ挙げるとすれば、H. Swoboda, *Zur Geschichte der attischen Kleruchien*, in: *Serta Harteliana*, Wien, 1896, S. 28-32.; M. Wagner, *Zur Geschichte der attischen Kleruchien*, Tübingen, 1914, Diss.; Ph. Gauthier, *Les clérouques de Lesbos et la colonisation athéniennes au V<sup>e</sup> siècle*, dans: *Revue des Etudes Grecques*, 79, 1966, pp. 64-88.; P. A. Brunt, *Athenian Settlements Abroad in the Fifth-Century B. C.*, in: *Ancient Society and Institutions Studies Presented to VICTOR EHRENBERG on his 75 Birthday*, Oxford, 1966, pp. 71-92.; E. Erxleben, *Die Kleruchien auf Euböa und Lesbos und die Methode der attischen Herrschaft im 5 Jh*, *Klio*, 57, 1, 1975, S. 83-100.; W. Schuller, *Die Herrschaft der Athener im ersten attischen Seebund*, Berlin, 1974, S. 13-32.; Th. J. Figueira, *Athens and Aigina in the Age of Imperial Colonization*,

Baltimore, 1991. usw.

- 4) この問題に関しては、日本西洋史学会、第42会大会、東京大学、1992年5月16日、古代史部会において、「アテーナイ植民市の類型設定 — 「クテーマ型植民」と「エンクテーマ型植民」 — 」と題して、発表の機会を得た。

## 第1章 ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアの地理

ケルソネーソスは<sup>1)</sup>、トラキア南岸から南西に向かって腕のように突き出した大きな半島である。この半島は、アジア大陸の西岸に直面してヘレスポントス海峡を形成するが、この海峡の最短部、セーストス・アビュドス間の距離は4.5km<sup>2)</sup>、泳いで渡れる距離であると古代人は考えていた<sup>3)</sup>。この半島の重要性は、それが交通の十字路に位置したこと、また、半島自体が非常に肥沃な土地であったことにある。この肥沃さは、古代人にあまねく知られるところのものであり<sup>4)</sup>、例えば、ストラボンによれば「ケルソネーソスに関しては、テオドシアまでの海沿いの山がちな地域を除けば、他はみな平地で肥沃であり、穀物に非常に適し、少なくとも（蒔種量の）30倍を産する」と伝えられている<sup>5)</sup>。そもそも、半島にはトラキア人が住んでいたが<sup>6)</sup>、歴史時代になって、ドロニコイ人の住むところとなった<sup>7)</sup>。前7世紀になると、レスボスからのアイオリス人が、マデュトス、アローペコンネーソス、セーストスに、ミレトスとクラゾメナイからのイオーニア人が、リムナイ、カルディアに、テオスからのイオーニイ人がエライウースに植民した。彼等は、ドロニコイ人と共存して、農業に従事していたと考えられる<sup>8)</sup>。あるエピソードによれば、前4世紀初めに半島には11か12のポリスが存在していたと伝えられ<sup>9)</sup>、その史料にはポリスの名が記されていないが、それらは、アビュドス、ケルソネーソス・アプ・アゴラス、アローペコンネーソス、エライウース、カリポリス、カルディア、クリトテー、リムナイ、マデュトス、パクテュエー、セーストスに比定されると考えられる。半島に住むものたちは、一般には、ケルソネーソス人 (*Χερροννησίται*) と呼ばれていたが、彼等の政治機構は、そのような統一的なものではなく、半島の個々の都市が独立したポリスを形成していたと考えられている<sup>10)</sup>。

ナクソスは、キュクラデス諸島の中で最も大きく肥沃な島で<sup>11)</sup>、特にブドウ栽培が盛んであり、そのためディオニューソス信仰の中心地として有名である。この島の重要性は、ヘーロドトスの次の叙述に凝縮されている。「ナクソスは規模の点では大きな島ではないが、他の点では美しく、肥沃であり、イオーニアにも近く、そこには豊かな財宝も奴隷もある」、ナクソス侵略によって「ナクソスそのものやナクソスに従属しているパロスやアンドロスやキュクラデスと呼ばれる他の島々もペルシア王のものとなるであろうし、ナクソスを基地にすればそこから大きな豊かな島であるエウボイアへ簡単に攻撃ができる」<sup>12)</sup>。先史時代の島の住民は、トラークリア人、クレタ人、カリア人などであったらしいが<sup>13)</sup>、「ナクソス人はそもそもアテーナイ出身のイオーニア人起源である」と伝えるヘーロドトスの記述から<sup>14)</sup>、ナクソスは、歴史時代になってから、アテーナイからの移民によってイオーニア化されたと考えられる。ナクソスは、前735年にカルキス人と共にギリシア最古の植民市である、母市と同名のナクソスをシケリアに建設したことで有名である。母市ナクソスの最盛期は、リュグダミスが僭主であった前6世紀後半であったと言える<sup>15)</sup>。島は、常に、ナクソスという都市を中心とした一つのポリスを形成し、市民は、ナクソス人(Νάξιοι)と呼ばれていた<sup>16)</sup>。

エウボイアは、クレタ島に次ぐギリシアで2番目に大きく、ギリシアでも有数の肥沃な島として有名である。この島は、大陸と非常に近い位置にあり、僅か幅30mのエウリポス海峡によって、ロクリス、ボイオティア、アッティカから隔てられているに過ぎない<sup>17)</sup>。アテーナイに近いこともあり、前5世紀中エウボイアは、アテーナイの穀倉地帯として重要であった<sup>18)</sup>。島は、地形的に、肥沃な丘陵地の北部、山がちではあるが肥沃なレラントス平野を有する中部、肥沃な海岸平野を持つ南部の3地域に分割され、民族的にもまた同様に、テッサリア系のエロピア人とペライポイ人の北部、古いクレタ人とアバンテス人の中部、ドリュオピア人の南部に色分けされる。中部は、前7世紀から前6世紀にかけてイオーニア人に征服されてイオーニア化し、その中心都市がカルキスとエレクトリアであった<sup>19)</sup>。島全体には、およそ11の主要なポリスが存在したと考えられ、特に重要なのは、北部のヒスティアイア、中部のカルキス、エレクトリア、南部のカリュストスであり、その他は、北部のディオーン、アテーナイ・

ディアデス、ポシデイオン、中部のキュメ、グリュンカイ、ディアクリオイ、南部のステュラ、などである。これらの諸ポリスは、それぞれが独立のポリスを形成していた。エウボイアの黄金時代は、前8世紀から前6世紀の間、即ち大植民時代に相当する。カルキス、エレトリア、キュメなどが多くの植民市を建設したことは、良く知られている。しかし、前700年頃から前650年頃に戦われた、肥沃なレラントス平野を巡るカルキスとエレトリアとの戦争は、カルキスの勝利に終わったものの、エウボイアの有力ポリスである両市とも勢力を弱らせる結果となった<sup>20)</sup>。

註1) ケルソネーソスは、研究書などでは一般にケルソネーソスと表記されるが、史料においては、ヘーロドトスは *Χερσόνησος* と表記し、他の史料は普通 *Χερρόνησος* と表記する。ここでは、史料の翻訳部分においては、その史料の表記法に合わせるが、それ以外の場合はケルソネーソスとする。

2) Strabo. III. 591.

3) Strabo. II. 124.

4) Xen. Anab. V. 6. 25; Xen. Hell. III. 2. 10; Suid. s. v. *Χερρόν*; Aristoph. eq. 262; Agathias. V. 12 (Bürchner, *RE*. s. v. Chersonesos, S. 2243)

5) Strabo. VII 4. 6.

6) Bürchner, *op. cit.*, S. 2245.

7) Hdt. VI. 34; Steph. Byz; Constant. Porph. de them. II. 2.

8) Bürchner, *op. cit.*, S., 2245.

9) Xen. Hell. III. 2. 10.

10) V. Ehrenberg, Zur ältesten athenischen Kolonisation, in: V. Ehrenberg, *Polis und Imperium*, Zürich, 1965, S. 225–231.

11) Hdt. V. 31; Pind. Pyth. IV. 156; Plin. n. h. IV. 67.

12) Hdt. V. 31.

13) Diod. V. 50ff.

14) Hdt. VIII. 46.

15) Herbst, *RE*. s. v. Naxos, S. 2088.

16) *ibid.*, S. 2091.

17) Phillipson, *RE*. s. v. Euboia, S. 851.

18) Aristoph. Wasps. 715; Thuk. VIII. 96. 1–2.

19) Phillipson, *op. cit.*, S. 856.

20) *ibid.*, S. 856.

## 第2章 前6世紀における植民

アテーナイ人によるケルソネーソスへの最初の植民が行れたのは、前561年頃であったと考えられる。その時の事情をヘーロドトスは、次の様に伝える。当時アプシンティオイ人に脅かされていたドロニコイ人は、デルフォイに助言を求めたが、その結果、フィライダイ家のキュプセロスの子ミルティアデースに軍事的援助を申し出ることとなった。彼は、その申し出に応じ「彼と遠征を共にすることを望む全てのアテーナイ人を率いて」ドロニコイ人と共にケルソネーソスへ向けて航行して行き、彼はその土地を獲得し、彼を招いた者たちは彼を僭主に立てた。また彼は、アプシンティオイ人が半島へ侵入するのを防ぐために、半島の付け根に植民市を建設し、さらに、カルディアとパクテューエーとの間に半島を横断する大妨壁を建築した功績によって、死後ケルソネーソス人によってオイキステースとして崇拜された<sup>1)</sup>。

ヘーロドトスは、ミルティアデースが半島のどこに植民を行ったかは述べていないが、当時、カルディア、パクテューエー、クリトーター、及びエライウースにアテーナイ人が植民していたことが知られている。カルディアの最初の都市建設者はミレトス人とクラゾメナイ人であったが、ミルティアデースは、この時カルディアを占領して、アテーナイ人を植民させたい<sup>2)</sup>。一方、パクテューエーと<sup>3)</sup>、クリトーターは<sup>4)</sup>、この時初めて彼によって建設されたい。また、エライウースは、テオス人によって建設されていたが、詳しい時期は分からないが、前6世紀にアテーナイ人フォルパースによって植民されたいことが知られている<sup>5)</sup>。これらの植民の規模に関しては、ヘーロドトスは何も語らないし、ネポスもただ多かったというだけで<sup>6)</sup>、全く分からないが、植民者は、ドロニコイ人に招かれていったのであり、恐らく彼等と共に住んだであろう。

彼の後継者となったキモーンの子ミルティアデースは、ケルソネーソスの支配者として半島に渡り、前505年頃、そこからレームノスを植民した<sup>7)</sup>。この時の叙述からケルソネーソスの法的位置を窺い知ることができる。ヘーロドトスによれば「ケルソネーソスがアテーナイ人の支配するところとなった後、キ

モーンの子ミルティアデースは、季節風に乗って、ケルソネーソス半島の南岸にあるエライウスから、レームノスに一日で渡り切り、このことによって、誰も実現するとは思わなかった、例の神託をペラスゴイ人たちに思い起こさせ、彼等に島から出ていくよう要求した。ヘーファイスティア人たちは、これに従ったが、ミュリナに住む者たちは、ケルソネーソスがアッティカであることを（*εἶναι Χερσόνησον Ἀττικῆν*）認めず、抵抗し、包囲攻撃を受けた後、結局彼等も島を出ていった<sup>8)</sup>。これはヘーロドトスの時代の反映かも知れないが、前6世紀末、半島がアテーナイの領土であるとするアテーナイ人の主張は、全ての者に了解されていたわけではなかったことが窺える<sup>9)</sup>。

前493年にはヘレースポントス地方におけるペルシアの勢力が盛り返し、ケルソネーソスもペルシアの支配下に入り、ミルティアデースは、途中イムブロスへ身を隠して、命からがらアテーナイへ逃げ返った<sup>10)</sup>。恐らくこの時、多くの植民者とともに帰国したであろうと考えられる<sup>11)</sup>。帰国後、ミルティアデースは、半島において僭主政治を敷いた疑いで告訴されるが<sup>12)</sup>、このことは、半島にいた植民者がアテーナイ人と認められたことが、前提にされているであろう<sup>13)</sup>。また、彼は、結局無罪となるが、後に彼自身が將軍に選出されたことも考え併せれば<sup>14)</sup>、彼も含めて半島の植民者がアテーナイ人であったと見做してもよいのではないであろうか。

ケルソネーソスからレームノス、イムブロスが植民されたのとはほぼ同じ頃、前506年のカルキスへの植民がアテーナイ人によるエウボイアでの最初の植民であった。この年、スパルタは、アテーナイの民主政を打倒するためにエレウシスへ侵略し、ポイオティア人とカルキス人もそれに加わって北からアッティカへ侵攻したが、アテーナイは反撃に転じ、逆に1日のうちにポイオティアとカルキスを占領した<sup>15)</sup>。勝利したアテーナイ人は、ヘーロドトスによれば「4000人のクレールーコイを（*τούτους τετρακισχιλίους κληρούχους*）ヒッポボタイの土地に残した」と伝えられる<sup>16)</sup>。ヒッポボタイとは、馬飼いと呼ばれるカルキスの伝統的な富裕者であるが、彼等は、レラントス戦争の際に勝ち取った肥沃な土地をアテーナイのクレールーコイに奪われ、それ以後、政治勢力を失い、カルキスは民主政となり、クレールーコイたちがカルキスの主人となったと伝えられる<sup>17)</sup>。

その同じクレルーコイが前490年までそこに留まっていたことは、確実にある。その年に、ペルシアの勢力が、エレクトリアを攻撃しようとした時、エレクトリア人はアテーナイ人に救援を要求した。その時のことをヘーロドトスは、以下のように伝える<sup>18)</sup>。「アテーナイ人は（'Αθηναῖοι）援軍を拒否せず、カルキスのヒッポボタイの土地をクレーロスとして所有している4000人を（*τοὺς τετρακισχιλίους τοὺς κληρουχέοντας*）彼等に救援として与えた」、しかし、彼等が到着した時、エレクトリアの国論が二分していたため、指導者が「到着したアテーナイ人たちに（*τοῖσι ἤκουσι Ἀθηναίων*）」事情を話し、自分たちと共に全滅しないようにと、彼等に「彼等の国に（*ἐς τὴν σφετέρην*）引き上げるよう」頼み、「アテーナイ人たちは（*οἱ δὲ Ἀθηναῖοι*）、この点において忠告に従った」、そして彼等は、オーローポスへ渡り、命拾いした。これは同時代史料ではないが、ヘーロドトス自身は、4000人のクレルーコイを明らかにアテーナイ人と同一視していることが窺える。後に、この植民者たちがカルキスに戻ったという記録はない。

註1) Hdt. VI. 36–38.

2) Oberhummer, *RE*. s. v. Kardia, S. 1932; Steph. Byz. s. v. *Καρδία*.

3) Oberhummer, *RE*. s. v. Paktye, S. 2440; F. Jakoby. *FGH*. II. C. S. 51.

4) Oberhummer, *RE*. s. v. Krithote, S. 1900; F. Jakoby. *FGH*. II. A. S. 54; F. Jakoby. *FGH*. II. C. S. 51.

5) Oberhummer, *RE*. s. v. Elaius, S. 2227. アテーナイ人によって建設されたとみるものもある (*Der Kleine Pauly*, s. v. Elaius.).

6) Nepos. Miltiads. 1.

7) レームノス植民の経緯に関しては、拙稿III、51–54頁を参照。

8) Hdt. VI. 140.

9) A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, Manchester, 1964, p. 169.

10) Hdt. VI. 41.

11) V. Ehrenberg, *op. cit.*, S. 231.

12) Hdt. VI. 136.

13) V. Ehrenberg, *op. cit.*, S. 225.

14) Hdt. VI. 136.

15) Hdt. V. 74–77.



- 16) Hdt. V. 77.
- 17) Diod. X. 24. 3.
- 18) Hdt. VI. 100-101.

### 第3章 前5世紀における植民

ケルソネーソスは前469年以降アテーナイの勢力下にあったが、ペリクレスは、前447年のポントス遠征に乗じて半島を植民した。プルータルコスはその様に伝える。「軍事指揮のうち、彼（ペリクレス）のケルソネーソス周辺におけるものは、もっとも快く受け入れられ、ギリシア人の内でそこに住んでいる者たちにとっての助けとなった。というのは、彼は、アテーナイ人の内から1000人のエポイコイ（ἐποίκοις）を調達し、男たちによって諸ポリスを強化したのみならず、また、海から海へ連なる防壁と砦によって地峡を囲み、ケルソネーソスに散在しているトラキア人の侵入を封鎖し、そして、その土地が近隣の雑多な異民族による略奪に満ちあふれる原因となっていた、長い、辛い戦争を終わらせたからである」<sup>1)</sup>。今回の植民もミルティアデースによる植民と同様に、半島を荒らすトラキア人に対する防衛として歓迎されたこと、1000人の植民者が新しく都市を建設したのではなく、半島にある、具体的には分からないが、複数の既存のポリスに分けて植民させられたということから<sup>2)</sup>、植民者は先住民と同居したと考えられる。

プルータルコスはまた、植民市リストと呼ばれる記述を残している。それによれば、「彼（ペリクレス）は、ケルソネーソスへ1000人のクレールーコイ（κληρούχοις）を、ナクソスへは500人を、アンドロスへはその半分を、トラキアへはビザルタイ人と共に住む1000人を、また、イタリアへは他（1000人？）の者たちをシュバリスが再建された時に送り出した。人々はその町をトリーオイと名付けた。彼は、何もせずぶらぶらしている者と暇のため政治にちょっかいを出す者をポリスから追放するために、また、民衆の貧困を立て直すために、さらに、反乱を起こさないように恐怖と監視を同盟諸ポリスの中に同居させるために、このようなことをしたのであった」<sup>3)</sup>。この史料は、従来、植民の目的に言及した個所に専ら注目されてきたのであるが、ここでは特に、列挙

された植民の共通点に注目したい。この史料には、エウボイアが欠けているが、ケルソネーソス、ナクソスを含むグループ記述として、一つの共通項で結ばれている。それは、既存のポリスの場合であれ、新設の植民市の場合であれ、アテーナイの植民者が単独で植民するのではなく、他の同盟市民とあるいは他のポリスからの植民者と同居するという点である。

このリストは、しかし、この時期行われた全ての植民を網羅しているわけではない。ディオドーロスは、「(ペリクレスは) ケルソネーソスへ航行し、市民のうちの1000人にその土地をクジで分配した。これらのことが行われたのと同じ時に、もう一人の将軍であるトルミデースは、エウボイアへ渡り、他の1000人の市民にその土地とナクソス人の土地とを分配した」と伝え<sup>4)</sup>、パウサニアもまた「(トルミデースは) エウボイアとナクソスへアテーナイ人の内からクレルーコイ (*κληρούχους*) を導いた」と伝える<sup>5)</sup>。

ナクソスへの植民者が誰から土地を奪ったのかということについては不明であるが、明らかなのは、全てのナクソス人を追放したのではなく、ナクソスというポリスは存続し続けたということである。このことは、前447年以後も減額されて貢納表にナクソス人 (*Νάξιλοι*) という名が現れ続けることから証明される。従って、植民者は、ナクソス人と同居したものと思われる。

植民者たちは、前404年までそこにいたと考えられるが、その間の彼等の生活の一コマは、プラトーンの初期対話編の一つ『エウテュフローン』によって示唆される<sup>6)</sup>。この対話編の年代設定は前399年、場面はアテーナイのバシレウスの役所の前、ソークラテースとエウテュフローンがそこでばったり出会い、お互いの抱えた訴訟について立ち話をするという筋である。エウテュフローンの訴訟というのは、かつて彼の家族が植民者としてナクソスへ渡り、そこで農業を営んでいた時、彼の保護する日雇いが酒に酔って奴隷を一人殺してしまった、そこでエウテュフローンの父がその男の手足を縛り付け、溝に落として、彼の処置をどうするか思案していた間にその男が死んでしまった、という一件についてであった。この対話から窺い知ることができることは、引き揚げ後の状況として、エウテュフローンがアテーナイの役所に訴訟を起こしていることや、彼自身がアテーナイのプロスパルタ区の人と述べられていることなどから、ナクソスの植民者は、引き揚げ後、アテーナイ人として認知されていたであろう

うと考えられること、植民当時の状況として、ナクソスへの植民者は家族ぐるみで当地に赴き、彼等が自ら額に汗して土地を経営していたということである。

前404年、アテーナイは、ペロポネネーソス戦争の敗戦に伴い、サラミースを除く全ての植民市を失った。クセノフォンによれば、戦後「リュースンドロスは、アテーナイ人の駐留軍とどこか別のところにいる他のアテーナイ人と認められる誰かを（*εἰ τινα πον ἄλλον ἴδοι Ἀθηναίων*）アテーナイへ送り返した」と伝える<sup>7)</sup>。ケルソネーソス及びナクソスへの植民者は、この布告に従って引き揚げたと考えられるので、このことは、彼等がアテーナイ人として認められていたことを示唆するであろう。

ナクソスへ植民者が送られたのと同じ前447年、ポイオティアで反乱が起こり、その鎮圧の際にトルミデースは、エウボイアへも植民者を導いたが、この時のエウボイア植民に関しては、彼がカリュストスに1000人の植民者を導いたと推測されているが<sup>8)</sup>、詳しいことは分からない。

多くの史料が語るのは、その翌年の前446年に起こったエウボイア反乱鎮圧の際にペリクリースによって主導されたエウボイア植民に関してである。トゥーキューティデースは、しかし、多くを伝えない。「アテーナイ人は、再びエウボイアへ渡り、ペリクレースの指揮の下で全てを征服した。そして、彼等は、他の（ポリス）を同意によって処理したが、ヘスティアイア人を追放し、自分たちがその土地を奪った」<sup>9)</sup>。ここでは、同意に基づく植民と同意に基づかない植民という分類が窺える。ヘスティアイア植民に関しては、確かにエウボイア植民のうちの一つではあるが、これは、先住民全てを追放する「クテーマタ型植民」であると既に分類してあるので<sup>10)</sup>、例外としてここでは取り上げないこととし、同意に基づいたその他のポリスとは何であり、どのような同意であったかという問題に限定したい。

ブルータルコスには、トゥーキューティデースが明記しなかった、同意に基づいて処置された他のポリスについて言及している。ペリクレースは「カルキス人のうちで富と名声において際立っているヒッポボタイと呼ばれる者たちを追放し、また、全てのヘスティアイア人をその土地から追放し、アテーナイ人を植民させた」<sup>11)</sup>。即ち、他のポリスとは、カルキスのことであり、その同意の内容は、ヘスティアイアのように全ての住民を追放して、ポリスを破壊するの

ではなく、一部の住民だけを追放するというものであったことが窺える。

アイリアノスによれば、「アテーナイ人は、カルキス人を征服して、彼等の土地を2000のクレーロスにしてクジで分配した。それはヒッポボタイと呼ばれる者たちの土地であった。レーラントスと呼ばれるところで、アテーナーへの切り取り地を奉納し、そして残りを王のストアの前に立てられた、賃貸料の覚書が刻まれていた、石柱に従って賃貸した」と伝えられ<sup>12)</sup>、カルキスへの植民の規模が1800人であり<sup>13)</sup>、土地は、植民者が自ら耕したのではなく、先住民に賃貸されたことまで言及されている。

カルキス植民に関しては、非常に保存状態のよい碑文が残されている<sup>14)</sup>。この長い碑文史料は、ディオグネトスによる第1動議(1-39)、アンティークレースによる第2動議(40-69)、アルケストラトスによる第3動議(70-80)から構成される。ここで、取り上げたいのは、第2動議である。その中でも注目すべきは、2点ある。まずは、エレトリアへの言及である。「以上の誓いを、アテーナイ人とカルキス人は、なすべきこと、ちょうど、アテーナイ人のデーモスがエレトリア人について決議したのと同様に(41-43)」。ここから、カルキス人との誓いは、それに先立つエレトリア人との誓いをモデルにして書かれたものであったことが分かる。そして、ここで言及されたエレトリアに関するその碑文が偶然に現存している<sup>15)</sup>。これは、前446/5年に刻まれたものと思われ、内容は、カルキス碑文の14行目から27行目とほぼ同様の、エレトリア人とアテーナイ人双方の誓いの一部である。従って、エレトリアに関する史料は少ないが<sup>16)</sup>、エレトリアに対しても、カルキスに対すると同様な処置が取られたと考えられるであろう。

次には、植民者への言及と思われる個所である。「カルキスにいるクセノスたちは(*τὸς δὲ κσένος τὸς ἐν Χαρχίδι*)、(カルキスに)住んでいる間、アテーナイへ税を支払うことがないとしても、また、ある者にアテーナイのデーモスによって免税権が認められるとしても、他のもの(=他の諸税)を、他のカルキス人と同様に、カルキスに支払うべきこと(51-57)」。つまり、カルキスに居住するクセノスたちは、アテーナイによって課せられるべき税は、免除されるが、カルキスによって課せられる税は、カルキス人同様、カルキスに支払うべき義務のあることが読み取れる。ところで、クセノスとは、一体何

者であろうか。単なる在留外人か、傭兵か、アテーナイの植民者か。決めては  
ないが、アテーナイへ支払うべき税が免除されるという状況を考慮すれば、彼  
等をカルキスに居住するアテーナイ人と見做しても差し支えないのではないで  
あろうか。クセノスに関しては、小稿において後にも言及することになるであ  
ろう<sup>17)</sup>。前5世紀において、アテーナイは、エウボイアの2/3を領有してい  
たと言われ<sup>18)</sup>、その数字が正確なものかどうかは別としても、ここに挙げた以  
外のポリスにも植民者が送られた可能性はある。エウボイアは、しかし、前  
411年にアテーナイから離反し、植民者もその時アテーナイへ帰国したもの  
と考えられる<sup>19)</sup>。

註1) Plut. Per. XIX. 1-2.

2) 貢納金の減額が必ずしも植民の指標となるとは限らないが、これによって  
当時の半島における諸ポリスのグループ分けができる。前447年まで共同支払  
していたが、その後減額された額を個別に支払ったポリス=カリポリス、ケ  
ルソネーソス・アブ・アゴラス、マデュトス、リムナイ、セーストス、エ  
ライウース。前447年以前から個別に支払っていたポリス=アローペコンネ  
ーソス、アピュドス。初めから支払わなかったポリス=クリトテー、パクテ  
ュー、カルディア。支払わなかったポリスがトラキアとの境に位置し、ミ  
ルティアデースによって植民されたポリスと一致することから、前447年にも  
これらに植民者が送り込まれた可能性があるであろう。また、前447年以降減  
額された諸ポリスにもその可能性があるかもしれない。

3) Plut. Per. XI. 5.

4) Diod. XI. 88. 3.

5) Paus. I. 27. 5.

6) Plato. Euthyphro. 4. C; Vgl. Antiph. I. 16.

7) Xen. Hell. II. 2. 2; Plut. Lys. XIII. 3.

8) E. Erxleben, *op. cit.*, S. 85-86.

9) Thuk. I. 114. 3. 一方、テオポンポスは、ヘスティアア植民は、同意に  
基づくものであるという説を唱える (Strabo. X. 1. 3.).

10) トューキューディデースは、ヘスティアアを明らかにレームノス、イム  
ブロスと同類として分類している (Thuk. VII. 57. 2.). 拙稿III、70頁参照。

11) Plut. Per. XXIII. 2.

12) Ailian. v. h. VI. 1.

13) 普通、全クレーロスの1/10が神のものとして切り取られる。例えば、レ

スポス植民の最、3000のクレーロスに分割され、その内の300は、神のものとしてされた(Thuk. III. 50. 2.).

- 14) IG. I<sup>3</sup> 40.
- 15) IG. I<sup>3</sup> 39.
- 16) Strabo. X. 1. 3. この史料は、エレトリアは、ヘスティアイア同様、エレトリアのデーモスから奪って植民されたという。
- 17) 第4章、註(17)参照。
- 18) Andok. III. 9; Aisch. II. 175.
- 19) Schulthess, *RE*. s. v. κληροῦχοι, S. 821.

#### 第4章 前4世紀における植民

既に見たように、前447年にケルソネーソス、ナクソス、エウボイアの3植民市群が出揃うのであるが、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアというグループ記述は、前5世紀の史料には見られない。それが現れるのは、前4世紀初頭の史料において初めてのことである。アンドキデースは、前391年作の『平和に関して』の中で、前421年のニキアスの平和に言及して、当時アテーナイは「ケロネーソスとナクソスと3分の2以上のエウボイアとを持っていた。他のアポイキア(τάς τε ἄλλας ἀποικίας)について一つ一つ叙述すれば、話が長くなるであろう」と述べている<sup>1)</sup>。これが最初の例である。

ここからは、アテーナイが多くのアポイキアを建設したのは、ニキアスの平和の間であったと読めるが、実際には、前447年から前421年までの間である。この叙述のポイントは、どうやらニキアスの平和そのものではなく、むしろ、前421年という時期にあったように思える。前421年と言えば、メーロスを除く<sup>2)</sup>、前5世紀に建設されたアテーナイの全ての植民市が出揃う時期であり、前447年以降の植民市建設ラッシュが終わる時期に合致する。即ち、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアは、植民市建設ラッシュ時代に建設された植民市の代表として挙げられているものと考えられる。

ところで、前4世紀の同時代人にとって、このような過去の植民市をグループ記述することの意味は一体どこにあったのであろうか。それは、恐らく、レームノス、イムプロス、スキュロスというもう一つのグループ記述との対比とし

て意味を持っていたと思われる。アンドキデースは、同じく『平和に関して』の中で、これら2つのグループ記述を併記している点で興味深い。彼は、前391年におけるスパルタとの戦争継続の誤り証明するために、戦争継続の理由の正当性を一つ一つ反駁していくが、その一つとして「レームノス、イムブロス、スキュロスの島々を取り戻すためにか。それらがアテーナイ人のものたるべきことは、明確に（条約に）書かれているではないか。では、ケロネーソスやアポイキア（*τὰς ἀποικίας*）やエンクテーマタ（*τὰ ἐγκτήματα*）や損害賠償を取り戻すためにか」<sup>3)</sup>。ここでは、ナクソス、エウボイアは言及されていないが、それらがアポイキアと言い替えられているものと思われることは、すでに言及した彼の記述法から明らかである。ここにおいて、2つのグループ記述の分類基準が明かとなる。即ち、レームノス、イムブロス、スキュロスは、前4世紀に存続した植民市の代表として、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアは、存続しなかった植民市の代表として対比されているのである。

では、それらの植民市群はそれぞれ、法的にはどのように位置付けられていたのであろうか。まず、レームノス、イムブロス、スキュロスは、前386年の王の平和によって規定された<sup>4)</sup>。「一方、他のギリシア諸ポリスは、大きなものであれ、小さなものであれ、自治独立として放棄すべきこと、但し、レームノス、イムブロス、スキュロスは除く。これらは、昔と同様に、アテーナイ人のものたるべきこと（*εἶναι Ἀθηναίων*）」<sup>5)</sup>。即ち、3島は普遍平和によってアテーナイ固有の領土と認められたのである。

一方、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアは、前377年の第2次アテーナイ海上同盟決議によって規定された<sup>5)</sup>。この同盟は、できる限り前5世紀の帝国支配的性格を持たないよう配慮されているが、その一つとして同盟ポリスにおけるエンクテーマタの放棄を明記している。「アテーナイ人及びその同盟に対して同盟を結ぶポリスから、アテーナイのデーモスは、私的所有であれアテーナイ人の国家所有であれ、同盟を結んだポリスの土地に今あるエンクテーマタ（*τὰ ἐγκτήματα*）を放棄すべきこと（25~30）」「ナウシニコスがアルコーンの時から、私的にであれ、公的にであれ、またいかなる方法によってであれ、同盟諸ポリスの土地において、家屋であれ、土地であれ、エンクテーマタを所有することは（*ἐγκτήσασθαι*）、いかなるアテーナイ人にも許されざ

るべきこと (35~41)」。エンクテーマタとは、単なる土地財産とは異なり、他のポリス領域の中における、即ち、その土地財産の所有者が属するポリスとは異なる、よそのポリス領域の中における土地財産のことを意味する。この土地保有形態は、まさに、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアにおけるそれに一致する。なぜならば、これらの植民は、今まで考察してきたように、いずれも既存のポリスを破壊することなく、一部の住民を追放し、そこにアテーナイからの植民者が割り込んでいくタイプのものであったからである。

このように、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアへの植民は、一端は禁止されたのであるが、その後ケルソネーソスに対してだけは、再び植民が行われることとなった。ケルソネーソスは、既に前366年までに普遍平和によってではなく、個別の条約によってアテーナイの領土として国際的に承認されるに至ったらしい<sup>6)</sup>。前365年のティモテウスの成功は長続きしなかったが、前357年にアテーナイは、カレースを全権將軍としてトラキアへ派遣し<sup>7)</sup>、コトュスを継いだ3人の王たちと平和条約を締結し<sup>8)</sup>、この時カルディアを含むケルソネーソスの諸ポリスは、第二次アテーナイ海上同盟に加盟した。しかし、まもなく前355年にこの同盟は、アルタクセルクセス三世によって解体された。その後、前353年に3人の王の内の一人ケルソブレプテースは、ケルソネーソスにおいて再びアテーナイに敵対的となったが、アテーナイ人に対する自分の友情を確信させるために使節を派遣するに至り、植民が行われた<sup>9)</sup>。

その経緯は、ディオドーロスからある程度知ることができる。「アテーナイの將軍であるカレースは、ヘレスポントスへ航行し、セーストスのポリスを奪い、成人たちを殺し、他のものたちを奴隷に売った。そして、コトュスの子ケルソブレプテースは、フィリッポスに対する疎遠関係とアテーナイ人に対する友情から、ケルソネーソスにおけるカルディアを除く諸ポリスをアテーナイに譲り、デーモスは、それらの諸ポリスにクレルーコイ (*κληρούχοις*) を送り出した<sup>10)</sup>。ここから、セーストス及び他の諸ポリスにも植民が行われたと考えられる<sup>11)</sup>。植民の規模に関しては不明であるが、デーモステネースは、前353年作の『アリストクラテース反駁』の中で、当時「市民の内ケルソネーソスに住んでいる者たち (*τοῖς Χερρόνησον οἰκοῦσι τῶν πολιτῶν*)」がいたこと証言している<sup>12)</sup>。



前346年にフィロクラテスの平和が締結されたとき、アテーナイは、再びケルソネーソスへ植民者を送り出した。このことは、デーモステネースによって、前341年に書かれた『ケロネーソス情勢について』及び同年それに続いて書かれたほぼ同じ内容の『フィリッポスを攻撃する演説 — その3 — 』から明らかとなる。まず、領土に関して、デーモステネースは、ケルソネーソスをしばしば「我々のもの（*τῶν ἡμετέρων*）」と表現しているが<sup>13)</sup>、より明確には「王と全てのギリシア人があなたたち（アテーナイ人）のものであると承認しているケロネーソス」と叙述している<sup>14)</sup>。次に、ディオペイテスによる植民者の性格に関して、彼は、漠然と呼ぶときには「今ケロネーソスにいる者たち」などと表記するが<sup>15)</sup>、植民者を「クレールーコイ（*τοὺς κληρούχους*）」と表記し<sup>16)</sup>、明らかに同じ彼等をまた「傭兵たち（*οἱ ξένοι*）」とも言い換えている<sup>16)</sup>。さらに、彼等を「兵隊たち（*στρατιώτας*）」とも呼び<sup>18)</sup>、特に、民会の決議の後になってやっと招集される市民軍と対比させて「既成の軍隊（*τὸ συνεστηκὸς στρατεύμα*）」とも呼んでいる<sup>19)</sup>。即ち、ディオペイテスによって導かれた植民者たちがアテーナイ人ではなかった可能性もある<sup>20)</sup>。

ところで、半島には、すでに前353年に植民していたアテーナイの市民たちも当時まだそこに残っていたことは明らかである。前343年作のアイスキネースの作品『使節に関して』がそのことを証言する。「フィリッポスがマケドニアからやってきて我々（アテーナイ人）とアムフィポリスを巡って戦うことはもはやなかった。しかし、我々のクテーマタ（*κτῆματα*）である、レームノス、イムプロス、スキュロスを巡る戦いは、すでに始まっている。一方、我々の市民たちは（*ἡμῶν οἱ πολῖται*）、条約によって同意されたアテーナイ人のものであるケロネーソスを去りつつあった」<sup>21)</sup>。

では、植民者は半島のどこに住んでいたのだろうか。前341/0年の碑文は、一つの証言となる。これは、恐らく、現地住民と植民者とのトラブルを背景として決議された規定であるように読める。「エライウース人に対してもまた、ケルソネーソス人に対して民会が決議したのと同様の規定が（有効で）あるべきこと。將軍であるカレスが、エライウース人が自分たちの財産を保持して、ケルソネーソスにいるアテーナイ人とともに（*μετὰ Ἀθηναί[ων ἐν X] ἐρρονησῶσι*）幸福に公正に住むように、同様の方法によって、彼等の

世話をすべきこと」<sup>22)</sup>。この碑文から、アテーナイ人がエライウース人と同居していたことが明確となり、さらに、他のポリスにも同様の状態が存在したことが示唆される。

前339年にフィリッポスがケルソネーソスに侵入し、それをアテーナイ人が防いだ時、ケルソネーソス人は、感謝としてアテーナイに金の冠を贈ることを決議したが、その決議をデーモステネースが伝えている。「ケルソネーソス人の決議。ケルソネーソス人の内で、セーストス、エライウース、マデュトス及びアローペコンネーソスに住んでいるものたちは、アテーナイ人の評議会及び民会に60タランタ相当の金の冠を贈る」<sup>23)</sup>。このことから、恐らく、これらのポリスにも植民者が同居していたものと思われる。しかし翌年、アテーナイは、ケイロネイアの戦いに敗れて制海権を失い、ついにケルソネーソスも永久に失うこととなった。

註1) Andok. III. 9; Vgl. Aisch. II. 175.

2) メーロス植民は、前416年に行われた前5世紀最後の植民である。

3) Andok. III. 14-15.

4) Xen. Hell. V. 1. 31.

5) Tod. 123.

6) M. Jehne, Die Anerkennung der athenischen Besitzansprüche auf Amphipolis und die Chersones — Zu den Implikationen der Territorialklausel *ἔχειν τὴν ἑαυτῶν (χώραν)* in Verträge des 4. Jahrhunderts v. Chr. — in: *Hist.* XLI. 3. 1992. S. 279-281.

7) Demosth. XXIII. 173.

8) IG. II<sup>2</sup> 126.

9) 前357年説 (Busolt/Swoboda, *Griechische Staatskunde*, München, 1926, S. 1275. Anm. 5.).

10) Diod. XVI. 34. 3-4.

11) Vgl. IG. II. 2. 795; IG. II. 2. 701.

12) Demosth. XXIII. 103.

13) Demosth. VIII. 5.; 6; Vgl. 58.

14) Demosth. IX. 16.

15) Demosth. IX. 15; IX. 73; VIII. 17.

16) Demosth. VIII. 6; XII. 16.

17) Demosth. VIII. 9; Vgl. VIII. 20; VIII. 21; VIII. 23; VIII. 15-17. カルキスにおけるクセノスとケネソネーソスにおけるクセノスとが同質のものを示しているかど

- うかは、不明である。
- 18) Demosth. VIII. 26.
  - 19) Demosth. VIII. 17; 46.
  - 20) ディオペイテスと彼の傭兵に関しては、W. K. Pritchett, *The Greek State at War*, II, Berkley and Los Angeles, pp. 92-93. に詳しい。
  - 21) Aisch. II. 72.
  - 22) Di. Syll. I. 255=Di. Syll. II<sup>2</sup> 145.
  - 23) Demosth. XVIII. 92.

おわりに

以上の考察から得られた結果を総合して、結論に換えたい。地理的に見て、いずれも肥沃な土地であり、アテーナイ人が植民する以前から既に彼等と同族であるイオーニア人の住む土地であり、彼等のポリスは、既に全盛期を大植民時代に迎えていた。これらの要因が、アテーナイ人を導いたであろう。そして、この同族の誼から先住民の全てを排除するのではなく、一部のみを追放し、先住民の共同体を存続させたため、植民者は、先住民と同居する形となった。しかし、植民者は、先住民の市民団に組み込まれたのではないので、あるいは言い方を換えると、先住民の市民団に組み込まれないために、依然アテーナイ人のままであり、彼等に分配された土地は、それゆえに、外国のポリス領域内に存在するアテーナイの領土、即ち、エンクテーマタとして認識された。以上のような形態の本質的特徴は、一言で言うなら、同民族に割り込んで建設されたことにあるといえるであろう。従って、今まで仮にカテゴリーBと呼んできた植民市群を、以後便宜的に「エンクテーマタ型植民」と呼ぶこととし、ケルソネーソス、ナクソス、エウボイアを、同様な植民市分類の基本類型とする。この類型に従えば、ナウパクトス、アンドロス、ブレア、アミソス、シノーペー、アスタコス、レスボス、ノティオン、前365年のサモス、及び前361年のポティダイアも、同じカテゴリーに属すると考えられるが、これら残りの植民市に関する考察は、別の機会に譲ることとして、ここで得られた結果は、既に試みられた、「クテーマタ型植民」の実態研究との比較検討の材料となるであろう。

(広島大学大学院文学研究科)

## The Athenian Colonies on the Chersonesos, Naxos, and Euboia

by Hiroshi Maeno

The Athenians sent their colonists to the Chersonesos, Naxos, and Euboia many times from the end of the archaic period to the end of the classic period. In some texts two different group-descriptions of colonies can be seen; one is Lemnos, Imbros, and Scyros, the other is the Chersonesos, Naxos, and Euboia. It seems that the people of Athens who lived in the fifth and fourth century B. C. had an idea of distinguishing their colonies into two categories like that. What was the criterion?

I have given a hypothesis that the distinction between so called *apoikies* and *cleruchies* does not lie in the citizenship of colonists but in the concept of territory of Athens. I have already tried to make clear the characteristic of the first one, Lemnos, Imbros, and Scyros in following three points.

- (1) whether the former inhabitants were driven out or not.
- (2) whether the colonists were the Athenians or not.
- (3) whether the land of colonies was the Athenian territory or not.

To sum up the result, these colonies were founded by driving out all of the former inhabitants by force who were non-Greek. Although they established a new polis, the colonists were the Athenians in the fourth century B. C. and the lands were the territory of Athens, which was called *ktemata*.

In this paper the other group, the Chersonesos, Naxos, and Euboia will be examined in the same three points. The opposite result will be led that these three colonies were founded by coexisting with the former inhabitants who were the Ionians like the Athenians. The colonists were the Athenians and the lands were territory of Athens, which were called *egktemata*.